

扇子にて人の顔を打法やある。是に出はせて比興者と被申候。乍然大勢打寄り相談事あり。其時政宗おとなしやかに、扱も又四ういやつ御用に可立。政宗が相手にはならぬもの也。打て腹だに在るならば、何ほども打てや兼松と舞まひて笑れぬと。

一、明智光秀の妻が内助

城に天守あぐる事は、明智光秀江州志賀郡拜領の時、坂本の城に初めて營しと也。初め光秀、公方義昭公に二百石にて居し時、其頃振舞に汗迄を出し飯菜は各持寄て咄す事はや。光秀元來大すり切なれども難止様子にて、或時客數人同道し先へ案内をやる。内所には一錢の蓄無之儀能くしりぬ。何と仕るやと無心元、咄も身に不染。扱客へ汗を出したるをみれば天晴用意したり。光秀見て落涙に及び嬉しき事におもふ。其仔細内室終に不語。扱坂本城天守成就し、光秀先づ内所を同所して天守へ上り、是見給へ、上の御恩にてか様に結構し、湖山の絶景あれ見給へと云ふ。此時内室さらばむかしの貧苦を語らん、汗振舞の事御覺候やと云ふ。光秀中々覺えぬ。其時一錢もなし。せん方なく我等髪を切て賣、

無異儀振舞出したり。髪は常に包みて終に御目に不懸、今か様に富榮も君の御恩、疎かにおもひ給ふなと被申しと也。一、富樫介殿八歳にして賀州へ歸復
富樫次郎正親賀州を流浪して越前豊原へ蟄居。富樫介殿八歳にして賀州へ歸復し、野の市に居住す。

一、馬薬萬病圓の處方その他

馬薬方萬病圓

人參 其ま、きざみあぶる。

黄 芪 上のかはをさり刻み、水の内強少し入て、その水にてあへて天日にほし少しあぶる。

白 朮 上のかはをこそげてさき、二つ三つにわり、白水に二三日ひたし、さいくろ水をかへ、あぶらけをよく取事第一なり。さて割あぶる也。

木 通 上かはをこそげてさき其ま、きざみつかふ也。

地骨皮 水にてあらひ毛をさきてきざむ。

葛 根 煎かはをさり其ま、きざむ。

香附子 其ま、打くだけき、水に入れてよくあらひきざむ。但鉄をいむ。

山梔子 其ま、きざみ、くろくなるほどいり申候。

菝 木 其ま、刻み、よきすにてあへて天日にほしあぶる。

柴 胡 上かはをさり其ま、きざむ。但火をいむ。

白伏苓 くろかはをさり刻み少しあぶる。

縮 砂 上かはをさりもみくだき、あひだのしやうじ取り、水にてあらひ刻む。

黄 芩 其ま、刻む。但火をいむ。

陳 皮 水に付けひやけたる時、内の白みをさり刻みあぶる。

右各貳匁宛

かんざう 三分五爪

以上拾五味

此藥飼様の事、常に散藥にして置き、可飼時に至り水のりにてくるみほどに丸して、馬の口のおくへおし入飼也。諸病共に如斯。此藥用事は、關頭の脈有之時は、馬いかやうにつかれたりといふ共可用也。くわんの脈なき時はかならず不可用、其馬死するものなり。第一秘所如斯。桑島新右衛門入道秘密方は也。此藥は四季土用寒熱虚實を不嫌して、萬病に用て妙也。無病の馬にも一月に一兩度用ふる時は、彌息災になる。或は軍中長旅につかれすくみ、ぬかをうとみ、病舁何とも難見分時用て吉。是故に萬病圓と申也。馬諸毒にあたりすでに死せんとする時用ひて吉。馬腹中下り、又臟腑違ひ、遠里を乗て腹腸もみ切たるやうにつかれたるによし。

兩穴不通時用て吉。

右の通に御座候。少しも殘し申事乍恐神八幡無御座候。以上。

或馬醫云。此藥桑島秘藏也。但平生用るには人參・黄芪二味を除たるを善しとす。此二味にて却て穴のつまることありと。

いのかつちと云草をほりて、根ともにきざみほして置、冬になり馬のぬかに一つかみほどまぜて喰する。つまる事なし。こせうのこをふくべに入て持、たびにてもつまる時、耳の中へふき込み通する也。くつすりのあたりたるには、なんばんをくろやきにして付る妙也。脊に付け明朝痊愈ゆ。

一、いばを落すには、乾たる大豆葉にてなづれば其ま、落つ。

一、灸瘡には蓼をすりてつくる。又杉木の黒燒もよし。

一、なまづにはいわう・たんぱん等分に合せ、なまづの上を血の出るほどすりてつくる。

一、進士作左衛門二條城夜討話

明智謀叛の時、山崎庄兵衛・山崎彦右衛門・進士作左衛門